

## 『クリスマスを経験する』 ルカ2:8-20

2:8 さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。

2:9 すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。

2:10 御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

2:11 きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

2:12 あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。

2:13 するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒に神をさんびして言った、

2:14 「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。

2:15 御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは「さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と、互に語り合った。

2:16 そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。

2:17 彼らに会った上で、この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々に伝えた。

2:20 羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。

## ●序論

どこでも大きなイベントになっているクリスマスですが、世界で最初のほんとうのクリスマスの物語には、残念ながらサンタさんは登場しません。

でもたしかに、そこには、神さまからの素晴らしいプレゼントがありました。

それが、本当のこのクリスマスの物語の主演「イエス・キリスト」だったので。

## ●本論

## I. 栄光にめぐり照らされる経験がある

それは、ふつうに羊飼たちが生活していた日常に、突然起こったびっくりするような出来事でした。

2:9 すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。

今日、小さな灯りをここにおいています。あかりはものを照らす役割をします。明かりを灯すと気づくのは、そこに明るいところができると同時に、影ができるというこ

とですね。

ここにある光がいくらあっても、どうしてもそこに影ができてしまいます。

しかし、「光がめぐり照らされる」なら、影がおちるところはなく、すべてがその光によって照らされ尽くされ、影は生まれません。

「主のご栄光」と表現される、それは神さまがそこにおられて、その人々を、その光で覆い尽くしている…、羊飼いたちは、身近に神さまがおられることを感じる事ができた…ということなのです。

神さまは、ご自分の光、その栄光を持って、その貧しく、当時の世の中の底辺にいた羊飼いたちを照らしつくしました。

その栄光を持って伝えられている、この羊飼いたちへのメッセージは、今もなお、この聖書を通して語り続けられています。

2:10 御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

それが、世界で最初のクリスマスの物語、そして告げられた言葉です。

## Ⅱ. 幼な子を見る経験

世界で最初のクリスマスは、小さな赤ちゃんの誕生にありました。

この小さな赤ちゃんをめぐって、天使とその軍勢が、そして羊飼いたちが、またのちには有名な東の博士たちが、その誕生を祝って、賛美し、またひとめ見よう、お祝いしよう、とやって来ました。

救い主イエス・キリストは、最初からどんな人たちにも近く、親しくお会いできる場所で、そして、そういうお姿でお生まれになったのです。

幼な子の存在は人の心を素直に癒します。

その幼な子としてのお姿は、たとえそれがどんなに偉大な神の子であろうとも、そんな意識を持つ必要を忘れてしまう。そこに隔たりや距離感などフッと溶けきってしまう存在なのです。

だからこそ、このイエスさまは、どんな人にも、つまり「すべての人に、親しく寄り添うことのできる存在」となる事ができたのです。

神さまの御心は、神さまご自身とわたしたちの間の距離感をとりのぞき、神さまに近づいて欲しいということです。そのための”接点となる方”、生まれたイエスさまなのです。

天使たちのメッセージはこうでした。

2:10-12

御使いは言った「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。

「あなたがたのために…お生まれになった」と言っています。

「あなたも近づいていいんだよ…」とおっしゃっています。

それは、羊飼いに…というのではなく、時代を経て今、聖書を通して、このクリスマスのひとときを通して、わたしたちに告げられている言葉なのです。こうして、神から遣わされた赤ちゃんの誕生。それが、クリスマスのもっともすばらしいニュースなのです。

### Ⅲ. 感動の体験がある

人には、自分の全感覚を働かせて、その「存在」というものに「感動する能力」が与えられているということです。

このイエスさまの誕生をめぐって、知らせを受けた羊飼いたちは、「ああ、そうか?」「そんなことあったんだ。よかったじゃない」、と聞いただけでは終わらせませんでした。

この羊飼いたちは、動いたのです。

:15-16 御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは「さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と、互に語り合った。そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。

その彼らの経験した感動を聖書は短く記録していますね。

2:20 羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。

その前にこのクリスマスの経験は、この羊飼いたちによって人々に伝えられました。

:17 彼ら（ヨセフとマリヤ）に会った上で、この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々に伝えた。

この物語が、2000年にわたって語り継がれ、今日、その誕生を祝うときをクリスマスとして世界中に広まっています。その感動の経験が世界中に伝えられているのです。

サンタクロースの登場も、クリスマスツリーの存在も、そこにはありませんでしたが、そこに幼な子との出会いがあった。そしてそこに感動があったということです。

さいごに)

聖書に記されている、このクリスマスの物語は、2000年間人々の心に迫り感動を与

える神の愛の物語として受け継がれてきました。

2:11 きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

神のひとり子が、私たちのためにお生まれになった。わたしを救う救い主として、お生まれになった。

それは、だれもが近づくことのできる小さく優しい存在、赤ちゃんとしてお生まれになった。それが聖書の語るクリスマスの物語です。

そしてこの物語は、のちにこのイエスさまが、わたしたちの罪を身代わりに受けて十字架にかけられて死なれ、また三日目に蘇られたという物語と一対となって語られるのです。ここに神がわたしたちを愛する愛があると。神がくださった、「わたしたちのためにお生まれになった救い主なのだ」と。

1ヨハネ4:9-10

4:9 神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。

4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。

クリスマスの物語は、あの十字架と復活の物語に結ばれて、神さまから遣わされたイエス・キリストの姿として浮かび上がるのです。

聖書はこの方を指して、「ここに愛がある」と表現するのです。

いいえ、さらに一歩進めていうならば、「ここにあなたへの神の愛がある」のです。

この、クリスマスの物語は、皆さんにとって、決して遠い昔のこととして終わりません。

必ず、みなさんの人生を、そのままめぐり照らす光となり、暖かさとなり、慰めとなり、喜びとなり、感動となって結ばれます。

ああ、この方こそわたしの救い主なのだ、と知り、信じていただければ感謝です。